青森県総合学校教育センター　教科等教育長期研究講座報告［2010.3］
Ｇ１１－０３

中学校　特別活動

集団における所属感や連帯感を高めるための学級活動の在り方を探る
－文化祭に向けた事前から事後までの指導の工夫を通して－

つがる市立柏中学校　　教諭　　番　場　　亜由美

要　　旨

本研究は，集団における所属感や連帯感を高めるために，文化祭に向けた事前から事後に至る一連の学級活動の指導過程において，役割意識や責任感，他者理解を深める学級活動の在り方を探ったものである。リーダーは，役割を通して責任感を養うことができ，学級の生徒は，話合いを通して他者理解を深めた。それによって，学級では所属意識や連帯意識に一部変化が生じ，協力して取り組もうとする活動が見られるようになった。

キーワード：中学校　特別活動　学級活動　所属感　連帯感　文化祭

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会は平成20年１月17日に「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」の答申をした。その中で，今日の子どもを取り巻く社会状況の変化を背景に，人間関係の希薄化や社会体験及び自然体験の欠如が，子どもたちの人格形成に大きな影響を及ぼしていると指摘している。これを踏まえ，学習指導要領の特別活動の目標に「人間関係」の言葉が付け加えられた。人間関係は，人と人との触れ合いの中でこそ形成されていく。これは，児童生徒が望ましい集団活動を通して様々なことを学んでいく特別活動の果たす役割が大きいことを物語っている。

本校生徒は，小学校と中学校が地域にそれぞれ一校ずつという環境で，人間関係が小学校の段階でほぼ固定化されてしまい，中学校に入学してからも幅広く柔軟な関係が築けないという実態がある。これは，本校で４月に行った道徳性検査の集団や社会とのかかわりの数値の低さからも読みとれる。よって，本校では仲間との触れ合いの中で，支え合い，励まし合いながら共に努力していこうという人間関係を形成する力の育成に取り組んでいる。

検証授業の対象学級について，生徒は学級の普段の様子や人間関係を肯定的にとらえている。これは，日常の学級活動や生徒の日々の日記などからも感じられた。しかし本校の実態を考えれば，学年が進むにつれて，人間関係についての課題がいずれ表面化してくることが予想される。生徒の人間関係を形成する力を高めていくためには，生徒が互いに自他を認め合い，さらに集団として高まっていく学級づくりが一層求められていると言える。

そこで，学級活動を基盤とした話合いを行うとともに，学校行事で喜びや成就感を共有しながら人間関係を形成する力を育成したいと考えた。本研究では，文化祭に向けての学級の取組である「合唱コンクール」と「YOSAKOI コンクール」を通して，事前から事後までの一連の指導を工夫することで，集団への所属感や連帯感が高まり，望ましい人間関係が形成されることを明らかにしたいと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

文化祭に向けた事前から事後に至る一連の学級活動の指導過程において，役割意識や責任感，他者理解などを深める活動を取り入れることで，集団における所属感や連帯感を高めることができることを，実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

文化祭に向けた事前から事後に至る一連の学級活動の指導過程において，次のような手だてをとることに

より，集団における所属感や連帯感が高まり，望ましい人間関係を形成していくことができるであろう。

1　生徒の自主性を促すためにリーダーを生かす。
2　学級全員からリーダーへ励ましや感謝の気持ちを記したカードを贈る。
3　自己理解のために評価カードを活用する。
4　他者理解を深めるために話合い活動を定期的に実施する。

Ⅳ　研究の実際とその考察

1　研究における基本的な考え方

(1) 集団における「所属感」について

「所属感」とは，生徒一人一人が集団の成員として満足感をもつとともに，安心して過ごせる気持ちがもてる状態と考える。例えば，「学級にいて楽しい」「学級の役に立っている」「学級のみんなから必要とされている」などの，自分は学級の一員だと感じられる状態である。

(2) 集団における「連帯感」について

「連帯感」とは，集団において，生徒一人一人のつながりが，安心・信頼できる関係にある状態と考える。例えば，「学級の中で自分は一人ではないと思える」「どんなことにでも学級のみんなと頑張っていこうと思える」「学級のみんなのために何かしてあげたいと思える」などの，自分は学級に仲間がいると感じられる状態である。

2　「所属感」や「連帯感」を高めるための工夫

(1) 事前指導の工夫について

事前指導では，学級の生徒の実態から四つの活動において工夫を図った。

一つ目は，生徒の自主性を促すために行ったリーダーを生かした活動である。学級で活動する「合唱コンクール」と「YOSAKOI コンクール」（以下，「文化祭活動」）において，計画を立て，指示を出す役割のリーダーを選出するものである。これにより，リーダーに役割意識や責任感をもたせたいと考えた。

二つ目は，励まし合う場面づくりとして「エールカード」を活用することである。文化祭活動リーダーに学級全員から，励ます言葉を記したカードを贈り，リーダーの活動の意欲を喚起したいと考えた。

三つ目は，自己理解の場面づくりとして「頑張りカード」を活用することである。これは，個人ごとに活動目標と練習期間中の自己評価を記入するカードを作成して，常に改善点を考えながら翌日の練習に生かすことを目的として行うものである。

四つ目は，他者理解を深める場面づくりとして班による話合い活動を行うことである。まず，文化祭活動リーダーによる打合せを放課後定期的に設け，現状の報告と課題を出し合う。それについて班ごとに話し合い，深まりのある意見を交わしながら課題解決の手だてを探るための場にしたいと考えた。

以上のことに留意し，表１に示した指導計画を立てた。

表１　指導計画

実施日	実施内容	指導の工夫
９月　１日（火）	学活① 「文化祭に向けた学級目標の設定と係決め」 ＊文化祭活動リーダーとの打合せ①〔放課後〕	・文化祭を通して，生徒に望む担任の思いを語る。 ・学級目標や係決めは安易に決めることがないように，生徒の自主性や話合いで決定するよう促す。
９月１０日（木）	学活② 「文化祭に向けて個人目標の設定と頑張りカードの記入」	・個人目標は，係活動と学級での取り組みである文化祭活動に分けて，より具体的に設定するように指示する。
１０月　２日（金）	学活③ 「エールカードの説明と記入」 ※事前調査	・文化祭活動リーダーの励みになるようなコメントを書くよう指示する。
１０月　９日（金）	＊文化祭活動リーダーとの打合せ②〔放課後〕	・リーダーという同じ立場同士が悩みを出し合い，コミュニケーションを図ることによって，連帯感をもたせる。
１０月１３日（火）	学活④ 「文化祭活動リーダーから活動状況の報告，課題解決に向けての話合い」 ※事中調査	・課題解決に向けて，より具体的な手だてを考えるように指示する。
１０月１９日（月）	＊文化祭活動リーダーとの打合せ③〔放課後〕	・リーダーという同じ立場同士が悩みを出し合い，コミュニケーションを図ることによって，連帯感をもたせる。
１０月２０日（火）	学活⑤ 「文化祭活動リーダーから活動状況の報告，課題解決に向けての話合い」	・再度，個人目標の確認をさせ，課題解決に向けて，より具体的な手だてを考えるように指示する。
１０月２４日（土） ２５日（日）	柏中祭 「合唱・ＹＯＳＡＫＯＩコンクール本番」	・学級目標の確認をさせ，担任の思いを語る。
１０月２８日（水）	学活⑥ 「サンクスカードの説明と記入」 「文化祭を振り返ってアンケートと感想文の記入」 ＊文化祭活動リーダーとの打合せ④〔放課後〕	・文化祭活動リーダーの見えない部分の頑張りを紹介する。
１０月２９日（木） 〔本時〕	学活⑦ 「１年Ａ組パワーアップ大作戦」 ・支えてくれたリーダーの働きを考える。 ・文化祭を通して学んだこと ・パワーアップできたこと ※事後調査	・文化祭の合唱・ＹＯＳＡＫＯＩのＶＴＲを鑑賞し，互いの頑張りを確認する。 ・サンクスカードを紹介し，リーダーの頑張りを認め合う。
１１月　６日（金）	学活⑧ 「学級のシンボルを作ろう！」 ・今後の決意を清書し，学級旗に張り付けて，学級のシンボルを作る。	・決意を形として学級のシンボルを作り，いつでも目に見えるようにする。

⑵ 事後指導の工夫について

事後指導では，事前指導との関連や今後の学級生活に効果的に働くように，二つの活動において工夫を図った。

一つ目は，励まし合う場面と対応して行った，認め合う場面づくりとして「サンクスカード」を活用することである。これは文化祭活動リーダーに学級全員から，感謝の気持ちを記したカードを贈るもので，これによりリーダーの頑張りを学級全員で認め合おうと考えた。

二つ目は，振り返りの場面づくりとして学級旗を活用することである。生徒が，文化祭活動を通して学んだことをこれからの生活にどのように生かしていくか個人目標を立てさせる。それを学級旗に張り付けて掲示することで，学校行事における様々な場面を生徒に振り返らせ，団結のあかしを確認し，そこで得たものを普段の生活で実践しようとする決意をもたせたいと考えた。

３　検証授業

本研究にかかわる検証授業は，題材名を「１年Ａ組パワーアップ大作戦　～合唱・YOSAKOI の取組を通して～」として，つがる市立柏中学校の１年Ａ組の生徒を対象に行った。

研究主題である「所属感」や「連帯感」を高めるために，本時の活動のねらいとして，「文化祭の取組を振り返ることで，リーダーの頑張りを確認し互いに認め合うこと」「自己評価カードを用いて自分の活動を振り返ることで，自分がどんなことを学んだのかに気付くこと」「班による話合い活動を行うことで，仲間との他者理解を深めること」の三点を設定した。

表１の指導計画の学活⑦にあるように，本時では，文化祭活動リーダーの働きについて話し合う活動を取り入れながら，他者理解を深めることをねらいとして行った。始めに表１の指導計画の指導工夫にあるＶＴＲを見せ，互いの頑張りを確認し，一人一人の役割の大切さに気付かせた。また，文化祭を通して学んだことをこれからの学級生活のどの場面でどのように生かしていくか，ワークシートに決意としてまとめさせるようにして授業を進めた。

４　考察

⑴ 文化祭を振り返ってのアンケートの結果と考察

生徒が，文化祭後に回答したアンケート調査の結果と７月の体育祭後のアンケート調査の結果を比較したものが，表２である。体育祭後のアンケート結果によると，満足した理由として優勝できたからと答えた生徒が多かった。そして，文化祭は生徒の満足度がやや低くなっていることが分かる。体育的行事と文化的行事の本質の違いも原因と思われるが，これは，文化祭の練習中に文化祭活動リーダーと生徒の間で意見の対立が発生し，活動が分裂したことが大きな要因と考えられる。

表２　体育祭と文化祭の満足度の比較

	体育祭	文化祭
ア）とても良かった	２４人	１４人
イ）まあまあ良かった	８人	１５人
ウ）どちらとも言えない	１人	３人
エ）あまり良くなかった	０人	１人
オ）良くなかった	０人	０人

そして，「活動を通して学んだこと」に関する自由記述で最も多かったのは，体育祭では，協力することの大切さという意見だった。文化祭ではそれに加えて自分の責任を果たすこと，積極的に活動すること，他人の良さを見付けることができたことという幅広い意見が見られた。これは役割意識や責任感が養われ，他者理解が図られたためではないだろうか。

文化祭後の生徒の感想から読み取れることとして，生徒たちは，文化祭活動を結果だけで判断しているのではなく，結果に至る練習の過程を大事にしているということが挙げられる。生徒たちは，しっかり活動できなかったことを次に生かそうという前向きな気持ちや学級のみんなと努力することの大切さを，体験をもって学んだのではないだろうか。それが「努力すれば，負けたり失敗しても悔しいだけではなく，達成感や嬉しさが感じられることが分かりました」「駄目なところもあったけれど，きっとみんなが本気を出せば，学級の力は強くなると思いました」や，「何日間か，練習しない人がいた…その時，僕はなぜ説得しなかったのか，一つだけ後悔が残りました。今年悪かった所を改善して，来年は最高の文化祭にしたいと思います」などの感想に表れていた。

⑵ 文化祭に向けた事前・事後指導の結果と考察

文化祭活動リーダーの感想から，役割意識をもたせるためにリーダーを選出したことは，責任感をもたせるために効果的であったことが分かった。またリーダーは，試行錯誤しながらも計画，実行，反省と最

後までやり遂げたことを自信に変えたようだった。

図１の「エールカード」には，家に帰ってからもピアノの伴奏を頑張っている伴奏者のリーダーに対して「失敗を恐れずプレッシャーに負けず頑張れ！」という励ましのメッセージや，指揮者のリーダーに対して「重要な役目だけれど，恥ずかしがらず自信をもって堂々と頑張れ！」という力強いメッセージが書かれていた。

また，図２の「サンクスカード」には，踊りを考えて教えてくれたリーダーに対して「大変な役割を最後までやり遂げてすごいと思った」という敬いの気持ちや，かけ声や隊形移動を何度も考え直し悩んでいたリーダーに対して，「放課後遅くまでの練習お疲れ様。ありがとう！」という感謝の気持ちが書かれていた。また，活動中に，リーダーへの励ましと感謝の気持ちを記入したこれらのカードを廊下に掲示したことで，生徒の間で自他の良さに気付く目が培われ，学級に共感的な雰囲気ができたことが伺える。

図１　エールカード

図２　サンクスカード

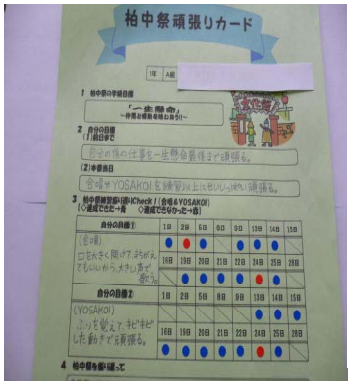

図３　頑張りカード

さらに，文化祭を成功させるためには，自分の仕事，役割，目標をしっかり決め，目的意識をもたせることが大切であるということを押さえるために，図３の「頑張りカード」を記入させた。毎日の練習の最後に，自分の立てた目標が達成できた場合は「青」のシールを，達成できなかった場合は「赤」のシールをカードに張って自己評価をさせた。シールの色で自分の活動過程が分かるので，反省を改善点として翌日の練習に生かしていくようにさせた。日を追うごとに，シールの数が増え色に変化が見え始めると，生徒たちはカードを互いに見せ合いながら励ましやねぎらいの言葉を交わしていた。また，自己評価することで，生徒たちは，自分が立てた目標を毎日振り返ることができ，目標を意識しながら係の仕事や役割に熱心に取り組んでいた。

(3) 検証授業の考察

生徒に文化祭活動中の自分を振り返らせるために，授業の最初に文化祭の様子をＶＴＲで視聴させた。その後，文化祭を支えたリーダーの働きについて「もし，リーダーがいなかったらどうしていたか？」ということを考えさせた。生徒たちは，リーダーなしには文化祭が成功しなかったことを話し，リーダーの重要さに気付くことができた。

次に，文化祭を通して学んだことを各自発表し，それが記入された「学びシート」を黒板に掲示させた。「所属感」と「連帯感」の高まりを見るため生徒には「学びシート」を自分に関することと学級に関することに分類させ掲示させた。「学びシート」の内容から分かるように，役割や責任を果たすことの大切さや喜び，目標に向かって努力することの素晴らしさ，そして，仲間がいるという頼もしさと心強さをとらえさせることができた。

《学びシートから（生徒の原文のまま）》（下線は筆者）

- どんなことでも<u>最後まで諦めずに一生懸命頑張れば，結果が駄目でも気分が良くなる。</u>
- <u>自分から進んで活動するということは意外に難しい。</u>
- <u>時間を守る大切さ</u>と<u>一生懸命やって仲間と協力することの素晴らしさ，</u>そして，<u>目標を達成した時の達成感を感じ力になった。</u>
- <u>学級のために頑張ろうという気持ちがもてた。</u>
- <u>協力することや団結することの大切さ。</u>
- <u>みんなと協力して活動することで，一人ではできなかったこともできる。</u>

この授業の最後に，学んだことを行事だけにとどめず，これからの学級生活のどの場面でどのように生かしていくか決意を立てさせワークシートに書かせた。自分自身のこれまでの実践では，行事で高揚する気持ちや態度を普段の生活に継続させることは難しく，指導もおろそかになりがちであった。しかし，学校行事における様々な場面を振り返らせることは，より一層互いのよさを認め合い，自己の成長を確認して，さらに伸長させようとする意欲を高めるのに必要なことであると，改めて考えさせられた。

(4) 「所属感」と「連帯感」に関する意識調査の結果と考察

検証授業期間中に行った「所属感」と「連帯感」に関する事前，事中及び事後の意識調査では，九つの内容を生徒に尋ねた。それぞれについて，４を最も評価が高く１を最も評価が低くなるような４～１の四件法で回答させ，分散分析を行った。その結果が表３で，グラフ化したものが図４である。表３より質問９の事中調査で2.19と低い値を示す以外は，「所属感」や「連帯感」が備わっていることを示していると考えられる。

表３　意識調査の事前・事中・事後の平均値

	番号	質　問　項　目	事前	事中	事後	p
所属感	1	１Ａにいることが好きですか？	3.47	3.00	2.97	***
	2	１Ａの一員だという気持ちがありますか？	3.25	3.06	3.06	
	3	１Ａにいることで自分は向上しますか？	2.88	2.78	2.72	
連帯感	4	１Ａで何かしようと計画する事に興味がありますか？	3.06	2.94	2.97	
	5	１Ａのために頑張ろうという気持ちがありますか？	3.13	3.13	3.16	
	6	１Ａに相談できる友達はいますか？	3.28	3.28	3.38	
	7	１Ａは協力して活動していますか？	2.78	2.41	2.53	*
	8	１Ａは男女の仲が良いですか？	3.13	3.06	3.03	
	9	１Ａはまとまりがありますか？	2.71	2.19	2.31	**

＊　p<.05　　＊＊　p<.001　　＊＊＊　P<.0001

分析の結果から，質問１，７，９に差が出ていることが分かった。この３つの項目についてライアン法により下位検定を行った。

質問１については，p<.001 で事前と事後との間に，p<.001で事前と事中との間に差が認められた。しかし，事前から事中，事中から事後といずれも評定の平均値が高い割合を維持していることから，有意差はあるものの，「所属感」が大きく落ち込んだとは言えないものと考える。

次に，質問７については，p<.05 で事前と事中との間に差が見られた。これは，活動中にリーダーとそれ以外の生徒による意見の対立が生じたことが関与していると考えられるが，事前と事後に有意差が認められないことから人間関係が修復され，その後，協力して活動できたと生徒は評価していると考えられる。

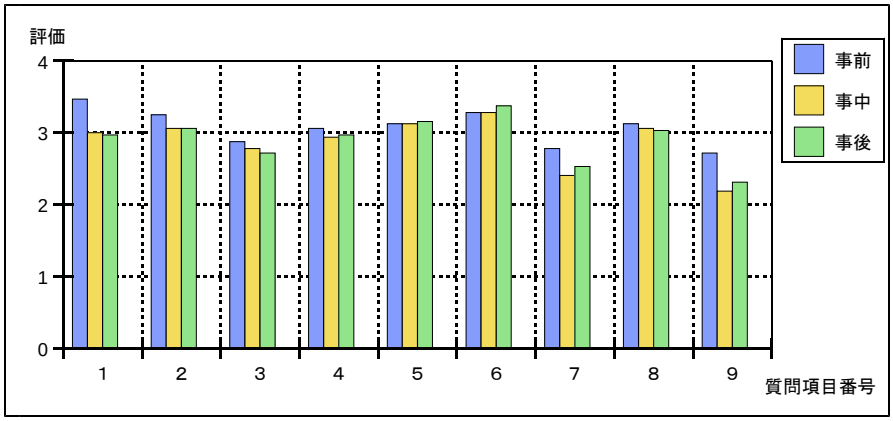

図４　意識調査の事前・事中・事後の平均値

質問９については，p<.001で事前と事中との間に，　p<.05で事前と事後との間に差が見られた。これは先に挙げた活動中に起きた意見の対立などの問題があったことや，それが学級という集団に不安定さや不信感をもたらしたことが原因ではないかと考えられる。これらの結果から，生徒は「連帯感」のうち，学級のまとまりについては低く評価していることが明らかになった。

このことについて，生徒の感想の内容の傾向と意識調査の結果は矛盾するようにみえる。この原因として，感想は，生徒がじっくり活動を振り返りながら反省点を前向きに考え文章化したものであり，意識調査は，あらかじめ教師側から与えられた項目に従って回答したものであるため，考え方が制限されてしまったことが推測される。よって，両方の実態を踏まえて学級指導に当たっていかなければならないと考える。特に，生徒との情報共有の機会を十分にもつことを忘れずに，今後は指導していきたい。

Ⅴ　研究のまとめ

文化祭を通して，リーダーを生かした日常的な学級活動に力を入れたり，話合いをする場面を設定したりしたことで，生徒の意識が変容してきたことが生徒の感想などから伺える。今回初めてリーダーという役割を経験した生徒の感想に，「私は，一生懸命歌うと心に決めていました。周りの友達もとても声が出ていました。そして，歌い終わった後，いつもは感じないとても良い気持ちになりました」とあった。感想からは学級のために自分の役割を果たそうとする気持ちが伺える。

また，「エールカード」や「サンクスカード」から他人の良さを見付けたり，自分が周りの役に立っていると再確認したりしていた生徒が多かった。

Ⅵ　本研究における課題

本校では，望ましい人間関係を形成するための教育活動の一環として，体育祭，文化祭，卒業式を三大学校行事として重視している。生徒にとっても，これらの行事から得られる喜びや成就感も大きいのだが，活動していく中でトラブルが生じる場合もある。本研究の活動過程で突発的に起きた意見の対立が，その後の活動に支障を来す場面があった。これは，人間関係にも影響を残すため，慎重に対処しなければいけないことである。教師のかかわりも必要だが，かかわり過ぎると生徒の自立にはつながらない。生徒たちが，学級の様々な考えに触れながら，自分の意見だけでなく他の人の立場も尊重できる環境を，教師がどう整えていくか考える必要がある。

また，今回はリーダーを生かした活動を中心に行ったため，それ以外の生徒に「所属感」や「連帯感」を感じさせる効果的な場面づくりができなかった。今後，学級全体を考えた配慮が必要である。

「所属感」や「連帯感」の育成は，活動中見えた生徒の成長を見逃さず，長いスパンで観察し，学級活動を通じて働きかけを講じていかなければならない。そして，人間関係を形成する力が本当に身に付いたかどうかは，取組後の日常生活でいかにそれが発揮されているかを，行動やアンケートなどで見ていく必要がある。これからは，文化祭で得られた役割意識や責任感，そして，学級のために協力しようとする意欲を日々の生活につなげていくための，生徒による取組を考えていく必要がある。

＜参考文献＞

文部科学省　2008　『中学校学習指導要領解説　特別活動編（平成20年９月）』
渡部邦雄・緑川哲夫・桑原憲一編著　2009　『特別活動指導法』　日本文教出版

＜参考ＵＲＬ＞

中央教育審議会　2008　「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf (2009.8.18)
桐木建始　2004　ANOVA4 on the web　http://www.hju.ac.jp/~kiriki/anova4(2009.11.25)